



今井小だより

第12号
令和4年
2月28日
青梅市立今井小学校



今井小HP

10年先を生きる力

校長 神尾 健彦

新型コロナウイルスの感染拡大、ロシアのウクライナ侵攻、このところの世界情勢はまさに先の見えない時代であるといえます。このような予測困難な時代と併せて、「努力すれば必ず成果が得られるとは限らない」という、かつての高度成長期とは違った社会全体のマインドも広がりつつあると感じます。社会全体が成長期にあった我々が過ごした子供時代の学校では、「頑張れば結果が得られる。結果が出ないのは努力が足りないからだ。」の掛け声のもと、追い立てられるように学んできました。それは、ある一定の成果も見られたことに異論はありません。

しかし思うような経済成長や課題解決が容易ではない今日の現状は、「頑張ればできる」という単純な価値観だけでは解決できないことが数多く見られます。そのため、「要領のよさ」だったり「コスパ重視」だったり「最終的に結果が出ればよい」という考えが社会の中で広がってきているとも感じます。結果の出ない努力は無駄な努力で、確実に成果の出ることにだけ取り組もうとする風潮があります。失敗を避け、困難を厭い、現実を直視することなく自分を守る姿勢が見え隠れします。このような現状では社会は停滞もしくは衰退していくことになりかねません。

現在の「確実に成果が出ることだけを要領よくこなす」という風潮は、失敗を過度に恐れすぎていることからきているのではないのでしょうか。「ほめて育てる」「叱らない子育て」といったキャッチフレーズが、家庭教育でも学校教育でも浸透しています。ほめることで子供がポジティブな感情をもたせたい、子供に厳しく接するのは子供が委縮してしまう、と子供が嫌な思いをしないように手取り足取り先回りして配慮し、失敗経験を避けてきてはいないのでしょうか。あるいは、親や教師が子供の失敗によって時間や手間がとられるのが嫌で、子供に挑戦させることをしてこなかったのではないのでしょうか。さらには、「厳しいことを言って子供に嫌われたくない」という思いはないのでしょうか。これは親である私の反省でもあります。子供が何か失敗して後始末をするよりも初めから自分がやってしまったほうが楽なので、子供に「何もなくていいよ、TVでも見てて。」と家事を手伝おうとした子供によく言ってしまっていました。「ほめる」が「できることだけやらせる」になり、「叱らない」が「失敗をしないようにやらせない」になってしまっていないのでしょうか。

だからこそ、学校教育においてはこれまで以上に社会の変化に主体的に関わって困難を乗り越える力の育成が強く求められます。子供が成長し10年先を生きる力を育むためには、子供自らが自分の現状を正しく認識し、自分には今の自分よりすばらしい自分になることができると信じ、自らの言動には責任が伴うことを実感することが大切です。その中で間違ったことを振り返り、失敗を乗り越えたくましく育っていくことが求められます。子供が自分の「やらなければならないこと」を自覚し、自ら判断し実行に移すことを重視していきます。

もうすぐ、新たなスタートとなります。今年1年を振り返り、来年度に向けてはっきりとした目標をもち、行動できるようにしていきます。今後とも学校教育へのご理解とご協力よろしく申し上げます。